■日本儒教の多様性

高島 元洋（お茶の水女子大学）

儒教は中国において成立する（たとえば孔子 B.C.551-479、朱子 1130-1200 など）。この思想が、朝鮮儒教（たとえば王仁［百済の人］、李退渓 1501-70 など）を媒介として、日本に伝わり、日本儒教となる。したがって儒教文化圏は、中国・朝鮮・日本というように同心円状に展開する。中心に中国がある。その伝播の先に朝鮮・日本がある。このように理解すれば、日本儒教は、中国儒教を中心としてそこからの距離として説明することが可能である。

しかしこの理解の問題点は、複数の思想を、基準となる思想を中心として、その同心円状の展開のなかに位置づけ、一元的に単純化するところにある。いまの議論では、基準となる思想は中国儒教である。朝鮮儒教・日本儒教は、この基準が展開したのものとして一元的に把握される。ここにあるのは自民族中心主義（ethnocentrism）の典型ともいうべき中華思想である。中国儒教が普遍であり、日本儒教は基準から距離をおいた特殊であると理解する[*1]。

しかしいうまでもなく日本において、中国儒教は基準でも普遍でもない。思想においては、共通の専門用語を使用していても（たとえば仁・孝・聖人など）、その意図する世界観がまったくことなることがある[*2]。共通の専門用語は同心円状に展開しても、世界観が共有されるとはかぎらない。

中華思想は中国儒教を普遍とし日本儒教を特殊とするが、この理解は思想が同心円状に展開することを前提とする。しかし日本儒教がそのような同心円状に位置づくのは、共通の専門用語においてだけであり世界観においてはまったく異質である。こうして、中華思想の前提は成立しないということになる。

日本儒教の異質な世界観を簡単に説明することはむつかしい。以下で問題にするのは、その世界観の一端である。しかもそれは日本儒教のかなり曖昧な側面を議論しようとしている。日本儒教は、中国・朝鮮と比較することが無意味となるほど、独自の多様性を展開する。中国儒教・朝鮮儒教の立場からすると、この多様性はきわめて不可解な部分となる。日本儒教の世界観にふくまれるこの多様性について考えてみたい。

---

*1高島元洋「「思想史」とは何かー「日本倫理思想史」に関する方法論的反省」（『お茶の水女子大学　比較日本学研究センター研究年報』創刊号、2005）を参照。

*2高島元洋「日本儒教の特徴」（『お茶の水女子大学大学院教育改革支援プログラム「日本文化研究の国際的情報伝達スキルの育成」平成２０年度　活動報告書　海外教育派遣事業編』pp.187-204、2009）を参照。